厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究

課題番号：H30－エイズ－一般－003

【分担研究３】福祉療養施設への出張研修、意見交換に関する研究

研究分担者：末盛浩一郎（愛媛大学医学系研究科　特任講師）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、本研究によってHIV 診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。30 年度の研究成果として、福祉療養施設への出張研修、意見交換を計 3 施設で医師・看護師・薬剤師・MSW のHIV 診療チームとして出向し実施した。この出張研修は施設への啓蒙とともにHIV 患者の入所・受け入れにも繋がり、極めて意義深い研究活動と考えている。

研究分担者
高田清式・愛媛大学医学部附属病院・教授
井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長
若松綾・愛媛大学医学部附属病院・看護師
小野恵子・愛媛大学医学部附属病院・総合診療サポートセンター・ソーシャルワーカー

A. 研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計 170 名以上の患者を治療している。四国地区は近年 HIV・エイズ患者の増加が著しく、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者のHIV・エイズ患者が多く、HIV 感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているが HIV に対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前より HIV 診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべき HIV感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。

この背景のもと、療養病院および福祉施設にて出張研修を通じて HIV 診療や介護の意識改善・啓蒙に努めることを目的とし

た。また、アンケート調査等を通じ地方のHIV 診療に関する連携の実態を把握し問

題点を検討する。

B．研究方法

積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を年に数施設単位（各参加者 30～100 名程度）で行う。当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向して講義をし、かつ各出張講義の終了時に全参加者に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケートを行う。またこの講義の理解度・感想も確認する。なおそれらの意見を、介護用の小冊子（研究 4）にも反映させる。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C．研究結果

HIV 感染者の増加に対応するため積極的に HIV 感染者の介護・受け入れを推進するために地域の療養型病院および福祉施設へ直接出張講義を計 3 施設で行った（各参加者 20～87 名、計 173 名）。当院から医師・看護師・薬剤師・MSW の HIV 診療チームとして出向した（図 1）。

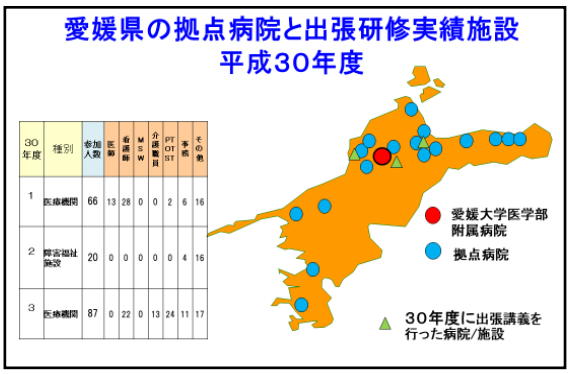

図１　愛媛県の出張研修実績施設

なお、各出張講義の終了時に HIV 感染者の福祉・介護についてアンケート調査を行った。主な内容は、①HIV 感染をどう感じたか、②自分の療養型病院・介護施設への入所をどう思うか、などに関してであった。その結果（回答数 171 名：回収率 99%）、①HIV 感染をどう感じたか（特に、恐れ不要と感じたか）に関しては、全く恐れない 27%、治療されていれば恐れない 49%で計 76%が恐れ不要と感じており、当方の積極的な姿勢と啓蒙の効果もあってか比較的 HIV に関し前向きに捉えてくれていると考えられた（図 2）。

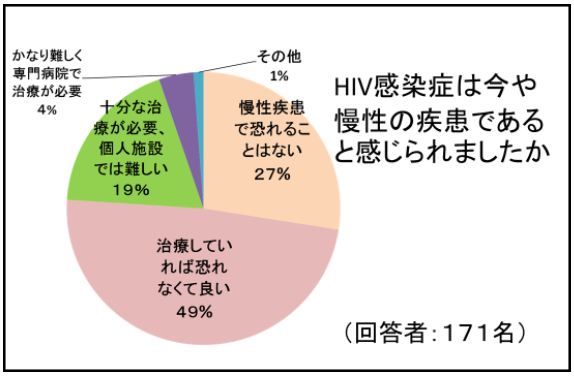

図２　HIV 感染をどう感じたか、恐れ不要と感じたか

さらに、②各自の療養型病院や介護施設への入所・受け入れをどう思うかに関しては、どんな状況でも受け入れる～不安は強いが受け入れるなどのある程度意識の差はあるが、89%が施設として受け入れ可能との多くの前向きな意見を得た（図 3）。

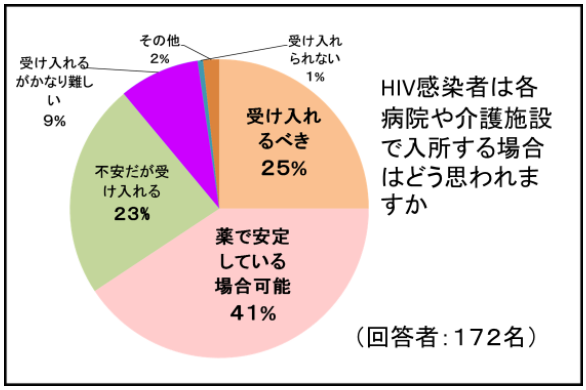

図３　自病施設での HIV 患者の受け入れ

さらに、参加者には「在宅・介護に役立つ薬の情報―抗HIV薬の基礎知識」の冊子を配布し（この冊子は、各拠点病院にも配布)、最新の抗HIV薬の知識も得やすいように努めた。

D．考察

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では平成30年末現在累計170名以上のHIV診療経験があり（県内の大半のHIV診療を担当)、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、また年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢のHIV感染者が多く見られHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において平成29年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者であるという現実があり、介護福祉の連携は緊喫の課題である。今年度は、具体的に計3施設の療養型病院・介護施設などへ直接出張講義をHIV診療チームとして行った。今後このような活動を通じて、介護や福祉環境を要するHIV患者の受け入れが円滑に行い得えると考えられ、直接に行う出張講義は積極的な連携の1方法として意義が高かいと考える。さらに、出張講義の際のアンケートで計86%は「治療等が良好なら不安はない」（うち27%は治療に関係なく不安はない）および89％が「施設として受け入れ可能」との比較的好感触な結果を得たことは、緊喫の課題である福祉連携の拡大・充実を今後円滑に図り得る可能性が高く期待できると考えられた。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良が年々進んでいるものの、今後HIV感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われ今後の1課題と考えている。

なお、これらの実践的な出張研修は、エイズ学会雑誌に投稿し査読の結果、近々掲載が決まっており、学会報告のみでなく、文体として全国に発信できることも意義深い。

地方において、充足した生活が1人では送れないHIV感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要性があると考える。さらになお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

E．結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV診療体制整備のために積極的に出張講義を行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要なHIV感染・エイズの増加に対応するために、HIV診療体制の整備は、特に地方においては拠点病院間のみならず介護・福祉施設との福祉連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

F．健康危険情報

該当なし

G．研究発表

1．論文発表

1．日本エイズ学会誌、20(2)：155 -159, 2018、石川朋子、末盛浩一郎、小野恵子、滝本麻衣、若松綾、中尾綾、乗松真大、木村博史、井門敬子、高田清式、安川正貴：愛媛県におけるエイズ診療地域連携を目指した研修会の評価―アンケート調査による研修会有用性の検討と MSW の役割―。

2．J Infect Chemotherapy 24(12): 1024-1025, 2018、Watanabe H, Mizuno Y, Kikuchi H, Miyagi K, Takada K, Mishima N, Okoshi H:An attempt to support by the Japanese society of travel and health for increasing travel clinics.

2．学会発表

1．高田清式、末盛浩一郎、山之内純 、西川典子、辻井智明、井門敬子、 木村博史、乗松真大、武田玲子、 若松綾、小野恵子、中尾綾、HIV 関連神経認知障害（HAND）に おける髄液中のネオプテリン量および HIV-RNA 量と ART 後の変化、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月

2．末盛浩一郎、小野恵子、若松綾、中尾綾、武田怜子、芝田佳香、宮崎雅美、乗松真大、木村博史、 田中景子、山岡多恵、井門敬子、竹中克斗、高田清式、愛媛県の各医療機関における HIV/ AIDS 研修会後のアンケート調査を介した意識調査の比較、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月

3．中尾綾、末盛浩一郎、山之内純、竹中克斗、高田清式、HIV 陽性者に対するアイオワ・ギャンブ リング課題－Net Score で評価してー、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月

4．岡﨑玲子、蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊広、林田庸総、岡慎一、潟永博之、 古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、 寒川整、加藤英明、石ヶ坪良明、中島秀明、吉野友祐、太田康男、茂呂　寛、渡邉珠代、松田昌和、重見　麗、岩谷靖雅、横幕能行、渡邉大、小島洋子、森治代、 藤井輝久、高田清式、南留美、 山本政弘、松下修三、健山正男、 藤田次郎、杉浦亙、吉村和久、 菊地正、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における 薬剤耐性 HIV-１の動向、第 32 回日本エイズ学会・学術総会、大阪、2018 年 12 月

5．木内英、谷口俊文、猪狩英俊、高田清式、高野操、菊池嘉、岡慎一、日本における HIV 関連神経認知機能障害（HAND）の有病率および関連因子（J-HAND 研究報告）、第 92 回日本感染症学会学術講演会、岡山、2018 年 5 月

6．末盛浩一郎、村上忍、松本卓也、宮本仁志、長谷川均、安川正貴、フルコナゾール耐性播種性クリプトコッカス症にボリコナゾールが奏功した 1 例、第 92 回日本感染症学会学術講演会、岡山、2018 年 5 月

H．知的財産権の登録状況（予定を含む）

該当なし